

I. 総括研究報告

厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）
総括研究報告

HIV 感染症および血友病におけるチーム医療の構築と医療水準の向上を目指した研究

研究代表者 渡邊 大 国立病院機構大阪医療センター HIV 感染制御研究室長

研究要旨 【目的】HIV 感染者、血友病患者とともに治療環境の向上によりライフスタイルの変化や高齢化がみられ、そのために包括的なチーム医療が極めて重要になってきている。このように HIV 感染症および血友病にはそれぞれの課題が残されており、ことに非加熱血液凝固因子製剤による HIV 感染血友病等患者の医療の質の改善に対しては、HIV 感染症と血友病の両者の医療水準の向上が必要になってくる。本研究ではガイドライン・HIV 診療のチーム医療・精神と心理・血友病・地域医療連携に 6 つの柱に注目して、チーム医療の構築と医療水準の向上を目指す。【方法】HIV 感染症については 4 つの分担研究で、血友病については 3 つの分担研究で、HIV 感染症+血友病については 1 つの分担研究を実施した。【結果】それぞれの分担研究でガイドライン作成、抗 HIV 薬に関わる遺伝子多型の解析、アンケート調査などを実施した。【考察】初年度は研究体制の整備を中心に行い、2 年目および 3 年目から順次データが蓄積され、研究成果が得られた。抗 HIV 治療ガイドラインを補完する意味で、チーム医療マニュアルは重要であり、分担研究の成果を順次、落とし込んだ。チーム医療の構築と医療水準の向上には、各職種のレベルの向上に加え、地域医療を支える医療機関を含めた連携が必要である。

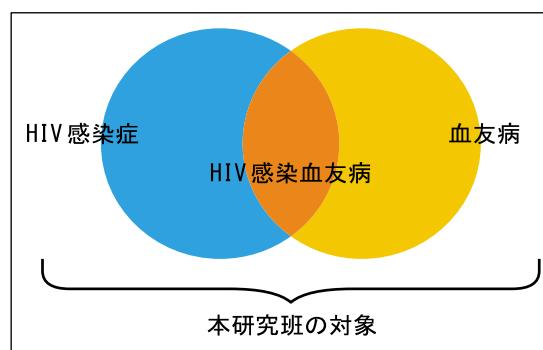
A. 研究目的

HIV 感染者・血友病患者とともに治療の向上により、ライフスタイルの変化や高齢化がみられ、包括的なチーム医療が極めて重要になってきている。しかし、HIV 感染症および血友病にはそれぞれの課題が残されており、ことに非加熱血液凝固因子製剤による HIV 感染血友病等患者の医療の質の改善に対しては、HIV 感染症と血友病の両者の医療水準の向上が必要になってくる。

本研究では下記のテーマに注目して、HIV 感染症と血友病分野におけるチーム医療の構築と医療水準の向上を目指す。

【抗 HIV 療法ガイドラインに関する研究】以下、ガイドライン研究とする。抗 HIV 治療ガイドラインを作成し研究班のホームページ上で広く公開することにより、日本の

HIV 診療水準の向上に寄与することを目的とした。



【HIV 領域のコンサルテーション・リエゾン精神医学診療体制の調査・開発】以下、CLP 研究とする。身体疾患の患者に併存する精神医学的問題を解決するコンサルテーション・リエゾン精神医学は患者ケアに効

果があるにもかかわらず、HIV 診療チームと精神科医療との連携体制の構築が十分とは言えない。シームレスな精神科医療の提供を目指すため、HIV 業務に従事する心理職に対して半構造化面接を行い、その阻害要因について探索し、啓発することを目的とした。

【受診中断の心理的要因および心理面に対するコロナ禍の影響に関する研究】以下、心理研究とする。HIV 陽性者の受診中断・継続の心理的背景と、受診継続のための介入方法を明らかにすること、新型コロナウイルス感染症がHIV 陽性者に対してどのような心理的影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とした。

【血友病患者の凝固機能及び血友病診療の包括的チーム医療に関する研究】以下、血友病研究とする。血友病患者の受診動向及び症状・治療の実際について最新状況を明らかにすること、包括的凝固機能を測定すること、コメディカルが血友病診療で直面している困難点を明らかにすることにより血友病患者の病態・ニーズに沿った治療の標準化を進め、血友病チーム医療のモデルを構築することを目的とした。

【抗 HIV 療法および HIV 診療のチーム医

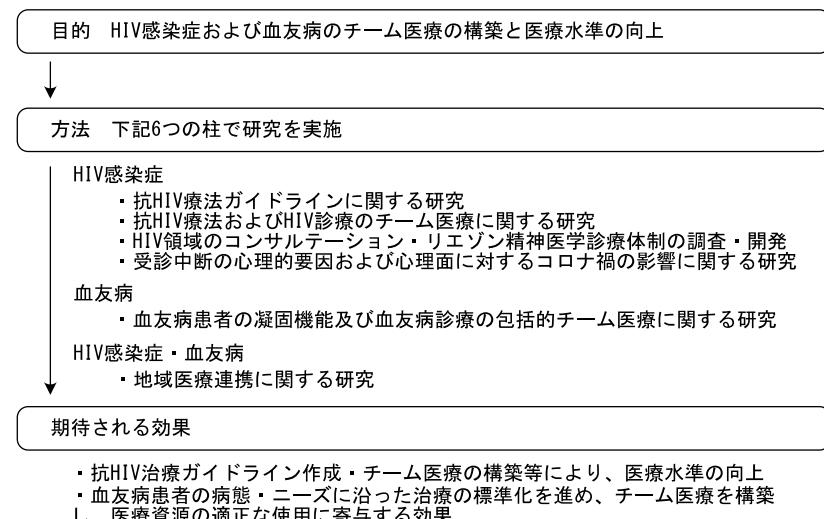
療に関する研究】以下、抗 HIV 療法とチーム医療研究とする。抗 HIV 薬に関わる代謝酵素と薬物トランスポーターの遺伝子多型と抗ウイルス効果および有害事象などの関連を明らかにすること、HIV 診療のチーム医療のためのマニュアルと抗 HIV 薬の適正使用のための Q&A 集の改定を行うことを目的とした。

【地域医療連携に関する研究】以下、地域医療連携研究とする。効果的な地域医療連携における HIV 感染血友病患者を含む HIV 陽性者への支援の充実と地域連携の課題の検討を目的とした。

B. 研究方法

【ガイドライン研究】ガイドライン改訂委員の協力を得つつ、国内外の学会や論文などから最新の抗 HIV 治療の情報を収集し、ガイドラインを改訂した。

【CLP 研究】拠点病院に勤務する心理士 (HIV 群) ならびに比較対照群として総合病院に勤務する心理士を (GHP 群) 対象に「HIV 感染者の併存精神疾患について、HIV 診療チームと精神医療チームの連携体制」を阻害する要因に関する半構造化面接を行った。面接内容について、複数の精神科



医および心理士による複数回のサマライズを経てテキストマイニングとして共起ネットワークでのデータ吟味および階層的クラスタ分析を実施した。得られたクラスタは χ^2 検定を行い 2 群での比較を行った。

【心理研究】大阪医療センター通院中の HIV 陽性者のうち、受診中断経験がある群（中断群）と、中断群と年齢・治療状況等をマッチングさせた受診継続している群（継続群）を抽出した。受診中断・再開・継続の理由を収集し、HIV 陽性であることについての受容度などから構成される質問紙調査と P-F スタディを実施し、その結果を両群間および標準と比較した。2021 年 8 月～9 月、同センター通院中の HIV 陽性者 300 名を対象に、コロナ禍の心理社会的体験、新型コロナウイルス恐怖尺度、HADS 一般外来患者用不安抑うつテスト等から構成される調査票を配布した。尺度得点とコロナ禍の心理社会的経験について関連を検討した。コロナ禍の一般人口（筑波大学による全国調査、調査時期は 2020 年 8 月～9 月）等と今回の参加者の心理尺度得点を比較した。

【血友病研究】血友病患者の受診動向については、大阪医療センター・奈良県立医大・三重大学に受診歴のある先天性血友病 A または B 患者を対象に、診療録から血友病の治療歴を含めた情報を抽出し解析した。大阪医療センターと奈良医大を受診した症例を対象とし rotational thromboelastometry (ROTEM)による全血凝固機能の評価を行った。

【抗 HIV 療法とチーム医療研究】ラルテグラビル、ドルテグラビル、ビクテグラビルを内服中の治療経験者を対象に、薬物トランスポーター・薬物代謝酵素（UGT1A1・CYP3A5・ABCG2・OCT2・MATE-1）の遺伝子多型を決定し、血漿中薬物濃度測定を行った。遺伝子多型と臨床検査値・血漿中薬

物濃度に関連する因子を探索した。HIV 薬の適正使用を目的とした Q&A 集の改訂では最新の医薬品インタビューフォーム、添付文書から必要な情報を抜粋し、いずれの薬剤についても同様の設問を記載した上で、回答の作成を行った。HIV 感染症外来チーム医療マニュアルについては、各職種から作成委員の編成し、各項目および内容のアップデートおよび長期療養に関わる項目の追加を行った。

【地域医療連携研究】HIV 感染症の基礎知識及び支援のための研修会の開催および近畿ブロック内の中核、拠点病院の看護担当者との連携のあり方について検討を行った。

（倫理面への配慮）

世界医師会ヘルシンキ宣言、人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針、個人情報の保護に関する法律等に準拠し、研究実施施設における倫理申請承認のもとで研究を実施した。

C. 研究結果

【ガイドライン研究】ガイドライン改訂委員の推奨薬についての議論を行い、ドルテグラビル/ラミブジン・ドラビリン・ラルテグラビルのエビデンスならびに推奨度について重点をおいて検討を行った。各年度末の日本における現時点の状況を踏まえた推奨薬および推奨度を決定し、ガイドラインを作成・公開し、印刷物を配布した。また、2022 年 5 月および 2023 年 8 月に新規抗 HIV 薬が承認されたことに対応してガイドラインの途中改訂を行った。曝露後予防の推奨薬については、第 1 推奨薬を RAL（400mg を 1 日 2 回）と TAF/FTC または TDF/FTC の組み合わせとし、従来の DTG と TAF/FTC または TDF/FTC の組み合わせに加え、BIC/TAF/FTC も第 2 推奨薬として位置づけした。

【CLP 研究】拠点病院勤務の心理士 31 名、総合病院勤務の心理士 46 名から収集を行い、両群を比較した。QOL の尺度・健康と労働パフォーマンスに関する尺度は両群に差を認めなかつた。雇用形態については HIV 群の方が常勤の割合が低かつた ($p=0.04$)。階層的クラスタ分析および 2 群比較を行うと、7 つの困難場面のうち「外部の精神科医療機関が無い」($p=0.0281$) と「外部の精神科医療機関との情報共有の難しさ」($p<0.001$)、6 つの対処方法のうち「外部の精神科医療機関に患者自身の口で伝えてもらう」($p=0.0139$) が HIV 群で有意に多かつた。一方で、GHP 群では「心理士業務の理解が得られない」($p=0.019$) と「精神科医師との見立て違い」($p=0.032$)、「医師と話し合いの場を作る」($p=0.021$) が多かつた。

【心理研究】受診中断の心理的要因に関する研究 : P-F スタディのスコアに関する両群と標準の比較では、中断群は標準と比べて 1SD 以上自責 I-A と無罰 M が高く、無責逡巡 M' が低かつた。継続群は標準と比べて 1SD 以上自責逡巡 I' と自責固執 i、無罰 M が高く、他責 E-A と他罰 E は低かつた。中断群と継続群の比較では、中断群は継続群よりも自我防衛 E-D、自罰 I が高く、継続群は中断群よりも無責固執 m が高かつた。心理面へのコロナ禍の影響に関する研究 : HIV 陽性者 300 名を対象に調査票を配布し、記入漏れのない 184 名 (61.3%) を分析対象とした。ワクチン未接種群は既接種群に比べて HADS の不安障害尺度の得点が高かつた。新型コロナウイルス恐怖尺度の最頻値は、ワクチン接種開始前的一般人口が 15 点、ワクチン未接種の HIV 陽性者が 16 点で、大きな差は認められなかつた。コロナ禍前の HIV 陽性者に比べてワクチン既接種の HIV 陽性者はうつの割合は低いが、

ワクチン未接種者のうつの疑いと確診の割合はコロナ禍前のデータより高かつた。

【血友病研究】大阪医療センター・奈良県立医大・三重大学に受診歴のある先天性血友病 A または B 患者 304 人に対する調査を実施した。各施設の年齢中央値は大阪医療センター 46 歳、奈良県立医大 20 歳、三重大学 39 歳であった。血友病性関節症の発症は年齢と相関し、関節症罹患率 (13.6~73.8%) は施設毎の通院患者年齢層により異なつていた。頭蓋内出血 (ICH) は、9.4~17.1% の患者で発症し、後遺症は 34.1% にみられた。それぞれの通院患者の主な年齢層の違いによって、ブロック拠点病院間の治療水準には差を認めなかつた。他医療機関への受診率は 21.6~53.0% であった。ブロック拠点病院において製剤処方を受ける患者の年間受診頻度は、2 か月に 1 回 (中央値) であるのに対し、他院で製剤処方を受ける患者の受診頻度は 4 か月に 1 回で有意に半減していた。

包括的凝固機能については、新規抗体製剤治療下の血友病 A 患者 14 例を ROTEM により検討し、軽症血友病 A 患者相当であることが示された。

関節の理学療法のセルフマネジメントに関する調査では、定期的にリハビリを継続して行つている患者で「筋力アップすることで歩行がしやすくなり、痛みも軽減する」「日々セルフトレーニングを行うことで関節の動く範囲が広がつた、出血が減つた」といった高評価のコメントがあつた。一方で関節症を伴うがリハビリ経験のない患者で「リハビリで出血するが怖い」「痛いことはしたくない」といったネガティブな印象を持っている患者も存在した。

【抗 HIV 療法とチーム医療研究】同意を取得した 220 名から検体を採取した。ビクテグラビルを内服中の症例では、OCT2

808G>T 多型を保有した症例でビクテグラビル内服後の血清クレアチニン上昇が統計学的に有意に高かった ($p=0.03$)。また、*ABCG2* の遺伝子変異を有していた症例で、自覚症状（食思不振、不眠、頭痛、異夢、眠気）を多く認めた ($p<0.01$)。Q&A 集については、2022 年度に承認・販売が開始された持効性水懸筋注製剤を中心に改訂を行った。HIV 感染症外来チーム医療マニュアルについては、医師、看護師、薬剤師、心理士、ソーシャルワーカーがコアメンバーとなり、それぞれの担当項目についてアップデートを行った。長期療養に関わる項目を新たに追加した。

【地域医療連携研究】令和 4 年・令和 5 年で、一般医療機関 1 件、訪問看護ステーション 1 件、介護福祉施設 5 件、障害者自立支援センター 2 件実施した。令和 5 年には、2 府 2 県の保健所 5 か所からの研修依頼があり、HIV 検査時の対応に限らず、地域支援者の窓口機能を担う役割の再認識と HIV 陽性者の長期療養における課題を踏まえた支援についても情報提供を行った。HIV 感染血友病患者及び HIV 陽性者への活動実績は、令和 3 年～令和 5 年で総件数 7,367 件、うち HIV 感染血友病患者は 336 件であった。支援内容は、加齢に伴う療養環境の変更、併存疾患に伴う地域医療機関との連携調整、心理・社会的不安を持ちながらの療養に伴う対応相談が主であった。地域支援者への情報資材として、「在宅医療を支えるみんなに知ってほしいこと」の改訂を行った。

D. 考察

【ガイドライン研究】新薬の開発など治療法の発展が今後も続くため、最新情報を掲載したガイドラインの発行は重要性を増していくと考えられた。

【CLP 研究】HIV 業務に従事する心理士に

認めた「外部の精神科医療機関が無い」などの困難場面・対処方法から、精神科医療機関の連携先の確保や、情報共有と連携方法の改善が重要と思われ、常勤雇用の拡充および外部の精神科医療機関の整備が望まれた。本調査研究によって、HIV 感染者に生じる精神症状の対応について、HIV 診療チームに特異的な精神科医療の連携困難の要因は、外部の精神科医療機関との連携が乏しいことが特定でき、今後の改善に向けた提言や啓発ができたと考えられた。今後は、これらのデータに基づいた評価尺度を作成し、今回の質的結果を量的結果に変換する予定である。

【心理研究】HIV 陽性判明に伴うストレスや、生活の中でのストレスに直面した際に、自分が悪いという思考に囚われて問題解決等に向かえず、ストレス状態から抜け出しつらいことが受診中断と関連している可能性が示唆された。よって受診中断の予防には、受診開始早期や受診再開時に、自責感や問題解決に焦点を当てた介入を行うことが重要であると考えられた。

コロナ禍では HIV 陽性者にも一定の割合で恐怖、孤立、経済面の悪化、飲酒量増加等が生じていることが明らかとなった。感染リスクによって不安が高まっていること、様々な制約や見通しのつかなさによって抑うつ気分が高まっている可能性が示唆された。

【血友病研究】本研究を通じて血友病患者の治療および ICH や関節症などの合併症における現状課題について明らかとなった。ロック拠点病院の限られた受診機会には、関節症を含めた包括的なケアをいかに提供するかが重要であることが示唆された。また、凝固因子製剤の定期輸注が主流となる前の世代を乗り越えてきた患者や、現在でも何らかの事情で十分な治療が行われてい

ない患者を中心に、関節症の進行が QOL および ADL の阻害要因として深刻な課題となっていることが示された。リハビリテーション経験のある患者と経験がない患者では、リハビリテーションに対するイメージが異なっていることが伺われた。すべての患者にリハビリテーションを経験させ、セルフトレーニングの有用性を教育することが必要と考えられた。

【抗 HIV 療法とチーム医療研究】アジア人において特異的に保有頻度が高い *ABCG2*

(*421C>A*) と BIC 投与による自覚症状の発現が関連する可能性が考えられた。このように、日本人に特有の遺伝的要因から抗 HIV 薬の副作用および薬物動態に及ぼす影響について明らかにすることで、副作用の回避、投与量の減量、用法の変更などの個別最適化された薬物治療の提供に繋がる可能性が考えられた。外来チーム医療マニュアルについては、HIV 感染症の日常の外来診療をチームで実施するにあたり、様々な状況で各職種が行うべき情報が集約されているため、HIV 感染症診療の質の向上、均一化に寄与する。今回のアップデートで追加した長期療養に関わる項目は高齢化、長期療養に伴う疲弊、在宅療養支援等であり、より現状に即した、様々な施設でこれから遭遇するであろう内容にアップデートできたものと考える。

【地域医療連携に関する研究】HIV 感染血友病患者を含む HIV 感染者への支援の充実のためには、研修効果は期待できるものであり、地域支援者が HIV 感染症に対する正しい知識の習得、HIV 陽性者の理解の促進し、地域での受け入れ先の拡大となるような継続的な教育活動が必要である。定期的な支援状況を把握と評価を行い、支援の格差が生じないような地域間での連携体制を構築していく必要があると考えられた。

E. 結論

初年度は研究体制の整備を中心に行い、2 年目および 3 年目から順次データが蓄積され、研究成果が得られた。抗 HIV 治療ガイドラインを補完する意味で、チーム医療マニュアルは重要であり、分担研究の成果を順次、落とし込んだ。チーム医療の構築と医療水準の向上には、各職種のレベルの向上に加え、地域医療を支える医療機関を含めた連携が必要である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

海外

Minami R, Watanabe D, Teruya K, Yokomaku Y, Endo T, Watanabe Y, A Marongiu, Tanikawa T, M Heinzkill, Shirasaka T, Oka S. Evaluation of efficacy, safety and tolerability of Bictegravir/ emtricitabine/tenofovir alafenamide (B/F/TAF) in clinical practice: results of the second 12-month analysis of BICSTaR Japan. Asia Pacific AIDS and Co-Infections Conference (APACC) 2023. Jun 8, 2023, Singapore

Tadashi Kikuchi, Mayumi Imahashi, Hiroyuki Gatanaga, Dai Watanabe, Rumi Minami, Shigeru Yoshida, Tsunefusa Hayashida, Lucky Ronald Runtuwene, Teiichiro Shiino, Masako Nishizawa, Atsuko Hachiya, Kazuhisa Yoshimura, Wataru Sugiura, on behalf of the

Japanese Drug Resistance HIV-1 Surveillance Network. Trends in prevalence of pretreatment drug-resistance in Japan: a comparison between the pre- and post- second-generation INSTI era. INTERNATIONAL WORKSHOP ON HIV DRUG RESISTANCE AND TREATMENT STRATEGIES. 20-Sep-2023, Cape Town, South Africa

Benoit Trottier, Fabrice Bonnet, Miguel Garcia-Deltoro, Massimo Andreoni, Marta Boffito, Berend J. van Welzen, Dan Turner, Sam McConkey, Dai Watanabe, Po-Liang Lu, Alper Gündüz, David Thorpe, Michelle L. D'Antoni, Tali Cassidy, Andrea Marongiu, Amy R. Weinberg, Richard Haubrich, Stefan Scholten. Real-World Effectiveness and Tolerability of Bictegravir/Emtricitabine/Tenofovir Alafenamide (B/F/TAF) in Treatment-Experienced People With HIV and a History of Antiretroviral Drug Resistance Mutations. IDWeek 2023, 13-Oct-2023, Boston

Benoit Trottier, Fabrice Bonnet, Miguel Garcia-Deltoro, Massimo Andreoni, Marta Boffito, Berend J. van Welzen, Dan Turner, Sam McConkey, Dai Watanabe, Po-Liang Lu, Alper Gündüz, David Thorpe, Michelle L. D'Antoni, Tali Cassidy, Andrea Marongiu, Amy R. Weinberg, MengJu Tsai, Richard Haubrich, Stefan Scholten. Real-World Effectiveness and Tolerability of Bictegravir/Emtricitabine/Tenofovir Alafenamide (B/F/TAF) in Treatment-Experienced People With HIV

and a History of Antiretroviral Drug Resistance Mutations. Taiwan AIDS Society Annual Meeting, 24-Feb-2024, Taipei

Watanabe D, Teruya K, Yokomaku Y, Minami R, Endo T, Watanabe Y, Marongiu A, Tanikawa T, Heinzkill M, Shirasaka T, Oka S. Assessment of the effectiveness, safety and tolerability of Bictegravir/Emtricitabine/Tenofovir Alafenamide (B/F/TAF) in routine clinical practice: The 2nd analysis of 12-month results of the BICSTaR Japan study. Korean AIDS Society 2022. Nov 18, 2022, Seoul, Korea

国内

矢倉裕輝、櫛田宏幸、廣田和之、上地隆史、西田恭治、上平朝子、吉野宗宏、白阪琢磨、渡邊 大：カボテグラビル・リルピビリンの持効性注射製剤の投与初期における状況調査。第 36 回近畿エイズ研究会学術集会、2023 年 6 月 10 日、神戸

渡邊 大、西田恭治、矢田弘史、矢倉裕輝、櫛田宏幸、廣田和之、松村拓朗、上地隆史、上平朝子、白阪琢磨：HIV 感染者における rotational thromboelastometry を用いた凝固機能検査に関する検討。第 36 回近畿エイズ研究会学術集会、2023 年 6 月 10 日、神戸

川畠拓也、阪野文哉、浜みなみ、渡邊 大、塩野徳史、西田明子、朝来駿一、青木理恵子、澤田暁宏、西岡弘晶、荒川創一、大森亮介、駒野 淳、森 治代、本村和嗣：クリニックにおける MSM 向け HIV・性感染症検査キャンペーン・2022 年度実績報告。第 36 回

近畿エイズ研究会学術集会、2023年6月10日、神戸

古賀道子、堤 武也、石坂 彩、水谷壮利、遠藤知之、田中聰司、渡邊 大、由雄祥代、三田英治、考藤達哉、藤谷順子、四柳 宏：HIV/HCV 共感染血友病患者の血中ケモカインの検討。第31回日本抗ウイルス療法学会学術集会・総会、2023年9月14日、横浜

矢倉裕輝、櫛田宏幸、廣田和之、松村拓朗、上地隆史、西田恭治、上平朝子、吉野 宗宏、白阪琢磨、渡邊大 :ABCG 2 の遺伝子多型がビクテグラビル投与症例の自覚症状およびトラフ濃度に及ぼす影響。第31回日本抗ウイルス療法学会学術集会・総会、2023年9月 15 日、横浜

安達英輔、横幕能行、渡邊 大 渥永博之、岡 慎一、白阪琢磨、若田部るみ、Nadine Chamay 、 Kenneth Sutton 、 Denise Sutherland-Phillips、Rimgaile Urbaityte、Ronald D' Amico、Jean van Wyk :SOLAR 試験 12か月の日本人参加者の結果 :持効性カボテグラビル + リルピビリン (CAB+RPV LA) の BIC/FTC/TAF 経口療法に対する無作為化切り替え試験。第37回日本エイズ学会学術集会・総会、2023年12月 3 日、京都

矢倉裕輝、櫛田宏幸、廣田和之、松村拓朗、上地隆史、西田恭治、上平朝子、吉野宗宏、白阪琢磨、渡邊 大 :カボテグラビル・リルピビリンの持効性注射製剤の血中濃度に関する検討 第1報。第37回日本エイズ学会学術集会・総会、2023年12月 3 日、京都

渡邊 大、Vasiliki Chounta、Cristina

Mussini、Charles Cazanave、安達英輔、Beng Eu、Marta Montero Alonso、Gordon Crofoot 、 Kenneth Sutton 、 Denise Sutherland-Phillips、Rimgaile Urbaityte、Alice Ehmann 、 Patricia de los Rios 、 Ronald D' Amico、William R. Spreen :持効性カボテグラビル+リルピビリンの bictegravir/emtricitabine/tenofovir alafenamide に対する Patient-reported outcomes : SOLAR 後期第III相臨床試験 12 カ月の結果。第37回日本エイズ学会学術集会・総会、2023年12月 3 日、京都

神野未佳、安尾利彦、西川歩美、森田眞子、富田朋子、宮本哲雄、水木 薫、牧 寛子、渡邊 大 : HIV 陽性者の受診行動とその心理的背景に関する研究。第37回日本エイズ学会学術集会・総会、2023年12月 4 日、京都

阪野文哉、川畑拓也、浜みなみ、渡邊 大、塩野徳史、西田明子、朝来駿一、青木理恵子、澤田暁宏、西岡弘晶、荒川創一、大森亮介、駒野 淳、森 治代、本村和嗣 : クリニックにおける MSM 向け HIV・性感染症検査キャンペーン (2022年度実績報告)。第37回日本エイズ学会学術集会・総会、2023年12月 4 日、京都

照屋勝治、横幕能行、渡邊 大、遠藤知之、南 留美、田口 直、Rebecca Harrison、Andrea Marongiu、白阪琢磨、岡 慎一 : ビクテグラビル／エムトリシタビン／テノホビルアラフェナミド (B/F/TAF) の日本人 HIV 陽性者 (PWH) に対する有効性と安全性 : BICSTaR Japan 24 カ月解析結果。第37回日本エイズ学会学術集会・総会、2023年12月 5 日、京都

古賀道子、福田あかり、石坂彩、田中貴大、保坂 隆、伊藤俊広、江口 晋、遠藤知之、柿沼章子、木内 英、後藤智巳、高橋俊二、武田飛呂城、照屋勝治、花井十五、藤井輝久、藤谷順子、三田英治、南 留美、茂呂 寛、横幕能行、渡邊 大、渡邊珠代、四柳 宏：非加熱血液凝固因子製剤による HIV 感染血友病等患者に合併する腫瘍に関する研究。第 37 回日本エイズ学会学術集会・総会、2023 年 12 月 3 日、京都

菊地 正、西澤雅子、小島潮子、大谷眞智子、椎野禎一郎、俣野哲朗、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、鴻永博之、岡 慎一、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、宇野俊介、谷口俊文、猪狩英俊、寒川 整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、茂呂 寛、渡邊珠代、蜂谷敦子、今橋真弓、松田昌和、重見 麗、岡崎玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊 大、阪野文哉、森 治代、藤井輝久、高田清式、中村麻子、南 留美、山本政弘、松下修三、饒平名聖、仲村秀太、健山正男、藤田次郎、吉村和久、杉浦 互：2022 年の国内新規診断未治療 HIV 感染者・AIDS 患者における薬剤耐性 HIV-1 の動向。第 37 回日本エイズ学会学術集会・総会、2023 年 12 月 3 日、京都

渡邊 大：3 剤療法の歴史と 2 剤療法の未来。ランチョンセミナー9。第 97 回日本感染症学会総会・学術講演会、2023 年 4 月 29 日、横浜

渡邊 大：抗 HIV 作用注射剤と 2 剤療法の現状と課題。シンポジウム「治療の手引き」。第 37 回日本エイズ学会学術集会・総会、2023 年 12 月 5 日、京都

渡邊 大：帯状疱疹ワクチン。共催シンポジ

ウム HIV 感染者ためのワクチンガイドライン：エビデンスに基づく推奨。第 37 回日本エイズ学会学術集会・総会、2023 年 12 月 3 日、京都

佐倉彩佳音、矢倉裕輝、藤原綾乃、松本絵梨奈、駒野 淳、渡邊 大、白阪琢磨：日本人 HIV-1 感染症患者におけるビクトテグラビル投与に伴う、代謝酵素及び腎尿細管トランスポーターの遺伝子多型と臨床検査値の変化との関連性。第 35 回近畿エイズ研究会学術集会、2022 年 6 月 4 日、奈良

渡邊 大、飯田 俊、廣田和之、上地隆史、西田恭治、上平朝子、片野晴隆、白阪琢磨：HIV 感染者におけるヒトヘルペスウイルス 8 型関連バイオマーカーに関する検討。第 35 回近畿エイズ研究会学術集会、2022 年 6 月 4 日、奈良

渡邊 大：将来を見据えた薬剤選択の意義。長期的な観点から考える抗 HIV 感染症治療。ランチョンセミナー10。第 92 回日本感染症学会西日本地方会学術集会、2022 年 11 月 5 日、長崎

大谷眞智子、椎野禎一郎、西澤雅子、林田庸総、鴻永博之、佐藤かおり、豊嶋崇徳、渡邊 大、今橋真弓、俣野哲朗、菊地正、薬剤耐性 HIV 調査ネットワーク：国内 HIV-1 CRF07_BC の流行動向に関する研究。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、2022 年 11 月 18 日、静岡

安尾利彦、神野未佳、西川歩美、森田眞子、富田朋子、宮本哲雄、水木 薫、牧 寛子、渡邊 大、白阪琢磨：コロナ禍における HIV 陽性者の心理社会的経験とメンタルヘルスに関する研究

四本美保子、木内 英、渡邊秀裕、渡邊 大、白阪琢磨：早期治療開始が必要な HIV 感染症患者に対する抗 HIV 療法開始までの期間。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、2022 年 11 月 18 日、静岡

矢倉裕輝、藤原綾乃、櫛田宏幸、吉野宗宏、渡邊 大、上平朝子、白阪琢磨：HPLC 法を用いたヒト血漿中カボテグラビルおよびリルピビリンの同時定量に関する検討。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、2022 年 11 月 18 日、静岡

神野未佳、安尾利彦、西川歩美、森田眞子、富田朋子、宮本哲雄、水木 薫、牧 寛子、渡邊 大、白阪琢磨：AIDS 発症に影響する心理的要因に関する研究。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、2022 年 11 月 18 日、静岡

渡邊 大、照屋勝治、横幕能行、南 留美、遠藤知之、渡邊泰子、Andrea Marongiu、谷川哲也、Marion Heinzkill、白阪琢磨、岡慎一：実臨床でのビクテグラビル／エムトリシタビン／テノホビルアラフェナミド (B/F/TAF) の有効性、安全性及び忍容性の評価: BICSTaR Japan の 12 カ月解析結果 (2 回目)。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、2022 年 11 月 18 日、静岡

阪野文哉、川畑拓也、渡邊 大、塩野徳史、西田明子、朝来駿一、澤田暁宏、西岡弘晶、荒川創一、大森亮介、駒野 淳、森 治代、本村和嗣：MSM 向け HIV・性感染症検査キャンペーン (2021 年度実績報告)。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、2022 年 11 月 18 日、静岡

渡邊 大、飯田 俊、廣田和之、上地隆史、西田恭治、上平朝子、片野晴隆、白阪琢磨：HIV 感染者におけるヒトヘルペスウイルス 8 型関連バイオマーカーに関する検討。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、2022 年 11 月 18 日、静岡

菊地 正、西澤雅子、小島潮子、大谷眞智子、椎野禎一郎、俣野哲朗、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、鴻永博之、岡 慎一、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、宇野俊介、谷口俊文、猪狩英俊、寒川 整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、茂呂 寛、渡邊珠代、蜂谷敦子、今橋真弓、松田昌和、重見 麗、岡崎玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊 大、阪野文哉、森 治代、藤井輝久、高田清式、中村麻子、南 留美、山本政弘、松下修三、饒平名聖、仲村秀太、健山正男、藤田次郎、吉村和久、杉浦 亘：2021 年の国内新規診断未治療 HIV 感染者・AIDS 患者における薬剤耐性 HIV-1 の動向。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、2022 年 11 月 18 日、静岡

米田奈津子、渚るみ子、中濱智子、東 政美、佐井木梨花、大楠裕子、白阪琢磨、渡邊 大：当院に通院する HIV 陽性者の大規模災害に対する備えの現状と課題の検討—災害への備えと避難行動について—。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、2022 年 11 月 18 日、静岡

渡邊 大：LTTS 達成のために BIC/TAF/FTC が果たす役割について。ランチョンセミナー1。第 36 回日本エイズ学会学術集会・総会、2022 年 11 月 18 日、静岡

吉田 翼、西本奈穂、長谷川裕子、田中聰司、福武伸康、山本俊祐、榎原祐子、阪森亮太郎、

三田英治：腹痛を主訴に来院し、大腸内視鏡検査を契機にランブル鞭毛虫が確認された1例。第239回日本内科学会近畿地方会、2023年3月4日、大阪

渡邊 大：抗HIV療法におけるTAF含有レジメンの有用性について。スポンサードセミナー2。第95回日本感染症学会学術講演会、2021年5月7日、横浜

種田灯子、光井絵理、上原雄平、花岡 希、山本裕一、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨、加藤 研：抗HIV治療開始後に1型糖尿病を発症し、免疫再構築症候群の関与が疑われた3症例。第64回日本糖尿病学会年次学術集会、2021年5月20日、WEB

櫛田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、廣田和之、上地隆史、渡邊大、西田恭治、吉野宗宏、上平朝子、白阪琢磨：HIV-1感染血液透析症例におけるドラビリン血中濃度についての検討。第34回近畿エイズ研究会学術集会、2021年6月12日、WEB

中内崇夫、櫛田宏幸、矢倉裕輝、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、山下大輔、井上敦介、上平朝子、吉野宗弘、白阪琢磨：大阪医療センターにおけるアバカビル/ラミブジン配合剤の後発品の使用状況に関する調査。第75回国立病院総合医学会、2021年10月23日、WEB

田中大地、西村英里香、岸 由衣加、岩崎莉佳子、山口大旗、河本佐季、秦 誠倫、山本裕一、渡邊 大、西田恭治、加藤 研：抗HIV治療開始後に抗GAD抗体陽性となった症例。第58回日本糖尿病学会近畿地方会、2021年10月30日、京都

今橋真弓、照屋勝治、渡邊 大、遠藤知之、南 留美、渡邊泰子、Andrea Marongiu、谷川哲也、Marion Heinzkill、白阪琢磨、横幕能行、岡 慎一：実臨床でのビクトテグラビル/エムトリシタビン/テノホビルアラフェナミド(B/F/TAF)の有効性、安全性及び忍容性：BICSTaR Japanの12カ月後向き評価。第35回日本エイズ学会学術集会・総会、2021年11月21-23日、品川

櫛田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、廣田和之、上地隆史、渡邊大、西田恭治、吉野宗宏、上平朝子、白阪琢磨：HIV-1感染血液透析症例におけるドラビリン血中濃度についての検討。第35回日本エイズ学会学術集会・総会、2021年11月21-23日、品川

矢倉裕輝、中内崇夫、櫛田宏幸、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、吉野宗宏、白阪琢磨：日本人HIV-1感染者におけるドラビリンの血漿中濃度に関する検討 第1報。第35回日本エイズ学会学術集会・総会、2021年11月21-23日、品川

中内崇夫、櫛田宏幸、矢倉裕輝、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、吉野宗宏、白阪琢磨：当院におけるドラビリンの使用状況に関する調査。第35回日本エイズ学会学術集会・総会、2021年11月21-23日、品川

西川歩美、安尾利彦、水木 薫、白阪琢磨、渡邊 大、三田英治：大阪医療センターにおける薬害HIV遺族健康診断受診支援事業の利用状況および利用希望等に関する検討。第35回日本エイズ学会学術集会・総会、2021年11月21-23日、品川

宇野俊介、菊地 正、林田庸総、今橋真弓、南 留美、古賀道子、寒川 整、渡邊 大、藤井輝久、健山正男、松下修三、吉野友祐、遠藤知之、堀場昌英、谷口俊文、猪狩英俊、吉田 繁、豊嶋崇徳、中島秀明、横幕能行、岩谷靖雅、蜂谷敦子、鴻永博之、吉村和久、杉浦 瓦 : E157Q 変異を有する未治療 HIV-1 感染者におけるインテグラーゼ阻害薬をキードラッグとした抗 HIV 薬開始後の臨床経過。第 35 回日本エイズ学会学術集会・総会、2021 年 11 月 21-23 日、品川

菊地 正、西澤雅子、小島潮子、大谷眞智子、椎野禎一郎、俣野哲朗、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、鴻永博之、岡 慎一、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、宇野俊介、谷口俊文、猪狩英俊、寒川 整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、茂呂 寛、渡邊珠代、蜂谷敦子、今橋真弓、松田昌和、重見 麗、岡崎玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊 大、小島洋子、森 治代、藤井輝久、高田清式、中村麻子、南 留美、山本政弘、松下修三、饒平名 聖、健山正男、藤田次郎、杉浦 瓦、吉村和久、薬剤耐性 HIV 調査ネットワーク : 国内新規診断未治療 HIV 感染者・AIDS 患者における薬剤耐性 HIV-1 の動向。第 35 回日本エイズ学会学術集会・総会、2021 年 11 月 21-23 日、品川

織田佳晃、岡本 学、渡邊 大 : 高齢期を迎えた HIV 陽性者の生活状況と保健医療・福祉サービス利用状況に関する実態調査。第 35 回日本エイズ学会学術集会・総会、2021 年 11 月 21-23 日、品川

川畠拓也、阪野文哉、渡邊 大、塩野徳史、福村沙織、朝来駿一、澤田暁宏、西岡弘晶、荒川創一、大森亮介、駒野 淳、森 治代、

本村和嗣 : MSM 向け HIV・性感染症検査キャンペーン (2020 年度実績報告)。第 35 回日本エイズ学会学術集会・総会、2021 年 11 月 21-23 日、品川

川畠拓也、渡邊 大、駒野 淳、伊禮之直、真栄田 哲、崎原永辰、仁平 稔、久高 潤、仲宗根正 : 健康診断機会を利用した HIV・梅毒検査の提供 (2020 年度実績報告)。第 35 回日本エイズ学会学術集会・総会、2021 年 11 月 21-23 日、品川

渡邊 大 : ブロック拠点病院における保険薬局薬剤師との連携を考える。シンポジウム 7 「保険薬局薬剤師を活用した外来患者服薬支援について考える～医師、看護師、薬剤師の連携～」。第 35 回日本エイズ学会学術集会・総会、2021 年 11 月 22 日、品川

渡邊 大、矢倉裕輝、廣田和之、上地隆史、中内崇夫、櫛田宏幸、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨 : 当院におけるドルテグラビル・ラミブジン配合錠の安全性・有効性・臨床検査値の推移に関する検討。第 35 回日本エイズ学会学術集会・総会、2021 年 11 月 21-23 日、品川

渡邊 大 : 抗 HIV 治療ガイドラインにおけるダルナビルの位置付けと今後の展望。ランチョンセミナー 8 「これまででも、これからもダルナビル製剤」。第 35 回日本エイズ学会学術集会・総会、2021 年 11 月 22 日、品川

山本 祐、廣田和之、渡邊 大、長手泰宏、柴山浩彦 : COVID-19 に対する mRNA ワクチン接種後に AIHA の再燃をきたした一例。第 234 回日本内科学会近畿地方会、2021 年 12 月 4 日、WEB

渡邊 大：近畿の HIV 感染症および治療の現状と薬剤師への期待。シンポジウム 13 慢性疾患としての HIV 感染症から長期薬物療法における薬剤師の果たすべき役割について考える。第 43 回日本病院薬剤師会近畿学術大会、2022 年 1 月 30 日、WEB

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし